環境を考える経済人の会 21
寄付講座　第８回　2005.12.８
ゲスト：岡田　卓也氏（財団法人イオン環境財団　理事長）
テーマ：「イオンの社会貢献活動」
　　―地球環境　企業と市民社会の対話と協力―

一方井誠治　第８回の京都大学地球環境公開講座「地球環境、企業と市民社会の対話と協力」を開講したいと思います。いつもは、松下和夫先生が司会進行を務めるのですが、本日は、カナダで開かれている「国連気候変動枠組み条約第 11 回締約国会議」、今年から京都議定書が発効したので、第１回京都議定書締約国会合も兼ねていますが、そちらに参加されていますので、本日は私、経済研究所の一方井が司会進行役を務めさせていただきます。

さて、本日は、たいへんご多用の中、また冷え込む中をイオン環境財団の岡田卓也理事長にお越しいただきました。本日は、「イオンの社会貢献活動」というテーマでお話をいただきます。冒頭に 15 分程のビデオを準備していただきましたので、まずそれから、上映させていただきたいと思います。

【ビデオ上映】

税引き前利益の１％を活動資金にさまざまな環境活動を支援

未来の子供たちのために、私たちに何ができるのでしょう。「イオン１％クラブ」は、地域の方々と共に、さまざまな活動に取り組んでいます。

グループ優良企業の税引き前利益の１％を活動資金として、環境保全、国際的な文化人材交流など、さまざまな活動に取り組む「イオン１％クラブ」。その活動の一つ、1990 年より継続している「小さな大使事業」は、2004 年、中華人民共和国広東省より高校生 20 名を日本に招待しました。

群馬県太田市でのホームステイ、体験入学を通じた日本の高校生との交流、また、ゼロエミッションを掲げる環境に配慮した工場や、イオン太田ショッピングセンターのゴミ処理施設などを見学しました。さらに、地元 NGO の環境保全活動にも参加。訪問先では、いつも質問が飛び交い、さまざまな体験を通じて、環境に対する取り組みの大切さを積極的に学びました。ツアー最終日には、各グループごとに学んだことを発表し合い、環境に対する理解を一層深めました。

1996 年に発足した「イオンこどもエコクラブ」は 10 年目という節目に当たる 2005 年５月、さらに内容をステップアップして、子供の健全な育成を目的とする「イオンチアーズクラブ」として活動を開始しました。これまでと同様、活動を通じて、環境に興

味を持ち、考える力を育てると共に、集団行動から社会的なルールやマナーを守ることを学んでいきます。

子供たちが環境先進国から学ぶ「ドイツに学ぶエコライフツアー」。このツアーは、ドイツの取り組みを学び、日本の環境問題を今後どのように解決し、どのように行動したらよいかを考えてもらうために実施しています。これまでの２年間で 100 名を派遣し、そして 2005 年で３回目を迎える「ドイツに学ぶエコライフツアー」。今後も、日本の子供たちが未来の地球環境を考える機会として継続していきます。

また、環境保全活動の一環として、自然や森の大切さをテーマにした「エコロジーミュージカル」を公演。地域の子供たちも参加でき、親子が一緒に自然に対する理解を育み、深めていただけるミュージカルとして、これまでに、延べ７万人の方にご覧いただきました。

2004 年８月。対人地雷廃絶を願う世界 11 ヵ国約 100 人の子供たちが、滋賀県新旭町に集い、「地雷をなくそう！世界こどもサミット」が開催されました。「イオン１％クラブ」では、このサミットを支援するだけではなく、より多くの方々に地雷を考え、行動していただくことを目的に「地雷をなくそう！キャンペーン」を実施。大勢の皆様から賛同を集めました。現在も、世界 91 の国と地域に２億個とも言われる地雷が埋められており、地雷を全て取り除かない限り、半永久的に被害者をなくすことはできません。イオンはこれからも、皆様と共に地雷をなくす活動を続けていきます。

2004 年 10 月。新潟県中越地方を震源とする地震が発生しました。被災地では、緊急避難用の大型テント「バルーンシェルター」を設置。緊急支援物資の提供や炊き出しを行いました。また、生活必需品を仮設テントで販売するなど、イオンは、万一の災害時も地域コミュニティの中心となれるショッピングセンターを目指しています。さらに、イオンのグループ各社の店頭では、緊急支援募金も実施しました。2004 年 12 月に発生したスマトラ島沖の地震災害を受けて、スマトラ島沖地震による津波被災者緊急支援募金を実施。総額１億 8,880 万円を寄付しました。さらに引き続き、スマトラ島沖地震災害下の子供たちのために復興支援募金も実施しました。

国内外のショッピングセンター周辺に、
地域に自生する樹木の苗木を植樹する「イオンふるさとの森づくり」

木を植えています。

イオンでは、お客様を原点に平和を追求し、人間を尊重し、地域社会に貢献するという企業理念のもと、企業市民としての責任を果たすべく、さまざまな環境保全、社会貢献活動を積極的に推進しています。

2004 年９月１日。イオン株式会社は、日本の小売業としては初めて、アナン国連事務総長が企業リーダーに向けて提唱したグローバルコンパクトへの参加を表明。人権・労働・環境・腐敗防止の分野に於ける 10 原則を掲げた国際的な基準に基づき、明確な

ポリシーを持って、公正かつ倫理的に事業活動を展開していくという強い決意を国内外に改めて示しました。

また、国内外のショッピングセンターに、その地域に自生する樹木の苗木をお客様と共に植樹する「イオンふるさとの森づくり」。毎月11日、お客様に投函していただいたレシートの合計金額の１％を、地域のボランティア団体などに還元する「イオン幸せの黄色いレシートキャンペーン」などを実施しています。

イオンはこれからも、よき企業市民として地域社会に貢献していきます。

できることから一緒に。

世界の自然環境を悪化させる地球温暖化。2005 年２月 16 日京都議定書が発効され、ますます社会全体で CO_2 削減への施策が必要となってまいりました。21 世紀の最大課題である環境問題は、国家レベルのみならず、民間企業や市民団体などの力が必要とされます。そのような変化を先取りして、財団法人イオン環境財団は、グローバルな視点で地球環境を守るための諸活動を自ら展開し、また、同じ志を持つ環境 NGO への支援を目的として設立されました。

2004 年９月 15 日マレーシア。マレーシアの流通近代化を目指すマハティール首相の招聘を受け、1984 年に設立されたジャヤ・ジャスコストアーズが 2004 年に 20 周年を迎えました。1991 年にマラッカ店でスタートしたイオンの植樹活動。以来、マレーシアのみならず、国内外のイオンの店舗で、植樹活動を続けています。９月 15 日のこの日は、ジャヤ・ジャスコストアーズ設立 20 周年。これを記念し、長年に渡ったスズの採掘や森林伐採で荒廃したクアラルンプール郊外の自然公園に植樹を実施しました。この活動には、日本とマレーシアのボランティア 2,850 名が参加。炎天下の中、３万本もの苗木を植えました。引き続き９月 17 日には、WWF（世界自然保護基金）の協力を得て、ボルネオ島ビリト村で、日本・マレーシア合計 53 名のボランティアがオランウータンの餌となるマンゴーなどの果物の苗木を植樹しました。

1998 年から３年間実施した「万里の長城・森の再生プロジェクト」。日中合わせて 7,400 名のボランティアが参加し、39 万本植樹を実施しました。３年間の節目となる 2000 年には、日中友好の証として、記念碑が立てられ、以後、北京市民の憩いの場として親しまれてきました。ところが、厳しい自然環境や近年の異常渇水により、生育状況が悪化。2003 年から３ヵ年計画で、枯れた苗木の補植や水やりなどを実施することになったのです。2004 年７月３日は、日中合わせて 327 名のボランティアが 4,300 本の植樹を実施しました。

国内に於いては、長野県で、「森の里親植樹活動」を実施。長野県を仲人に、里親であるイオン環境財団が里子となる市町村の皆様と豊かな自然を共同で育んでいく事業です。乱開発の危機にさらされていた知床の自然を取り戻そうと、2002 年より５ヵ年計画で行っている「知床・森の再生植樹活動」。2004 年 10 月 10 日、ボランティア 120

名により 827 本の苗木が植えられました。同年 12 月には、絶滅の危機にあるシマフクロウを守るためにイオンの店頭にて、クリスマスラッピング募金を実施。期間中にお客様からお預かりした募金を、知床の自然環境の復元に役立てていただきました。2004 年 10 月 30 日。マツクイムシによる被害が拡大している加賀海岸で、ふるさとの木による「ふるさとの森づくり植樹祭」を加賀市民らと共に実施しました。

そして、2004 年からイオン環境財団が全国で推進している「里地里山整備」。人と自然が共生できる里地里山の再生のため、次代の主役を担う子供たちを中心に里山の体験を行いました。

1991 年の設立以来、継続的な支援を行っている環境 NGO への助成活動。2004 年現在、総額 13 億 2647 万円。1,615 の団体に助成を実施しています。

2005 年、イオン環境財団は設立 15 周年を迎えました。15 周年を記念し、日本国内の植樹などを続けている団体個人に対し、2004 年から 2006 年の３年間、毎年、総額 5,000 万円の特別助成を実施。また、国内の植樹事業では、三重県宮川村で 1,000 名規模の植樹を実施するほか、各地のイオン店舗周辺の公共施設を中心に２万本の植樹を実施する予定です。海外では、中国青島（チンタオ）のラオ山ダム周辺及び、タイ南部津波被災地で、1,000 名規模の植樹活動を予定しています。

さらに、自然の叡智をテーマにした「愛・地球博」のサイドイベントとして本年（2005 年）７月に豊田市、豊橋市などで行われる「こども環境サミット」を支援いたします。国境・民族といった壁を越えて、理解や交流を深め、新しい地球環境について考え、語り合う機会として、世界約 60 ヵ国から 650 人の 10 才から 14 才の子供たちが参加します。これに先駆け、2004 年７月、アメリカ、コネチカット州で開催された「2004 Tunza 国際こども環境会議」に「イオンこどもエコクラブ」から２名が派遣され、環境活動報告を行いました。

地域のお客様、志を同じくする皆様と一緒に、子供たちに夢のある未来を送るために、イオン環境財団は、これからも市民の方々と一緒に、様々な取り組みを行って参ります。命あふれる森を、未来の子供たちへ。

【ビデオ終了】

一方井　それでは、これから岡田理事長の話を伺うわけですが、その前に、私の方から、簡単にご経歴をご紹介させていただきます。岡田理事長は、1925 年に三重県でお生まれになりました。その後、早稲田大学の商学部に進まれて、在学中に軍の召集を受けられました。その後、戦後間もない 1946 年３月に岡田屋呉服店の第７代目の代表取締役に就任されました。以来、ジャスコ株式会社の社長、会長と歴任された後、2000 年に名誉会長相談役になられました。2001 年にイオン株式会社への社名変更に伴い、引き続き、イオン株式会社の名誉会長相談役として、現在に至っておられます。

この間、日本小売業協会や日本ショッピングセンター協会の会長等を歴任された他、1991 年には、環境関係者の間でたいへん有名な財団法人イオングループ環境財団（現・イオン環境財団）を設立され、今日まで理事長を務めておられます。さらに、これまでのご活動が高く評価され、1985 年には紫綬褒章、また 1989 年には英国から大英勲章 CBE などを受章しておられます。それでは、岡田理事長、よろしくお願いいたします。

小売業のフィロソフィーは平和、小売業の繁栄は平和の象徴

岡田卓也　ただいま、ご紹介をいただきましたイオン環境財団理事長の岡田でございます。先ほど、ビデオを観ていただきまして、私どもの活動については、ほぼ理解をしていただいたことと思いますが、お話の最初に、私の辿ってきた道を、少しお話申し上げたいと思います。

私の父は、私が 2 才のときに亡くなり、母は 11 才のときに亡くなりましたので、私は、昭和 20 年、戦争が終わると同時に復学をし、家業である岡田屋呉服店の社長に就任いたしました。当時、四日市は全部焼け野原でしたので、何もない焼け野原の真ん中に、5 人の社員と 40 坪のバラックを建てて、そして、小売業を姉と二人で始めたわけです。私は、そのときに、初めてチラシというものを撒きました。当時は、もちろん、アパレルなどはございません。下駄や鼻緒などいろいろなものを集めて、売出しをしました。小さなチラシに、学生でしたので少々洒落て、「焦土に開く」という題を付けました。長い戦争の間、小売店が宣伝をするということがなかったことと、配給制度だったため、いったい、いくらでそのチラシを折り込んでいいのか、新聞販売店では分からなかった時代であります。

私が初めてそのチラシを撒いたときに、お客様は、そのチラシを持って店頭に並ばれました。もう既にラジオや新聞で戦争が終わったことは報道されていましたが、お客様はそのチラシを握り締めて、「小売店がチラシを撒いて宣伝をする。大売出しをする。やっと戦争が終わって平和が来たのだ」ということを、実感として感じられたのだと思います。したがって、私はそれ以来、「小売業のフィロソフィーは、平和である。そして、小売業が繁栄していることが平和の象徴である」と言い続けてきました。そこから、私の人生に懸けるものはこの小売業だということを、そのときに決意したわけです。それから、55 年の月日が経ちました。そして、今から 5 年前、私は、社名をイオン株式会社に改めて、第一線から引退をすることになりました。

戦前からの長い歴史がある家業であった岡田屋呉服店に、すっかり全てのものが焼けてしまった中で、唯一残ったものは、「岡田屋さん」と地域の方々から言われる「のれん」（信用）でありました。そのときに、私の姉が最初に行ったことは、「もしも、戦前、戦時中の岡田屋の商品券を持っていらっしゃる方がおられましたら、直ちに現金にお換えいたします」というチラシを撒いたことでした。どのような事業であっても、特に小

売業という、一般の方々とその地域に支持をしていただくためには、信用というものが最も大切なものであるというように、その後もずっと考え続けてきました。

私どもには、いくつかの家訓がありました。一つは「大黒柱に車をつけよ」という家訓であります。これは、「お店というものは、お客様のためにあるわけですから、お客様の必要とする場所、お客様の必要とするものを大黒柱に車をつけた如く、その変化に対応して変わっていくべきものであろう」ということであります。私は、戦後、郷里の四日市辻という戦前で最も栄えた町、西町、北町、南町という一番古い町の交差点に店をつくったのですが、昭和 24 年になると、四日市の中心は、そことは全く違う諏訪新道という新しい町に移りました。理由は、四日市が焼け野原になって、地方に疎開されたお客様が、唯一焼け残った鉄筋コンクリートの市役所に、駅を降りて通われる道ということで、新しい町がそこにでき、最もたくさんのお客様が通られることになったのです。さらに、四日市では、近畿日本鉄道が四日市の市中を通っていたものをショートカットして、新幹線ができることに対応して、時間を短縮するために大きなカーブをなくし駅の移動が発表されました。それによって、四日市の中心街は近畿日本鉄道の駅に近いところに移動したため、私どもは、また、諏訪新道を捨てて駅前に店舗をつくりました。

郷里の四日市では亜硫酸ガスで
庭のナンテンが実らず、モクセイの花が咲かなくなり
環境・公害に強い関心を抱く

そのような変遷をしてきたわけですが、よく、「企業の寿命は 30 年」と言われます。ですので、30 年が近づくと、私は「岡田屋」を捨てて、新しく生まれ変わるにはどうすべきかということを考えました。そこで、合併という手段を用いて、ジャスコに生まれ変わったのです。その後、日本では、ご承知のようなバブルがありました。私どもの同業も次々と、ここ４～５年の間に倒産をいたしました。私どもは幸いにして、「上げに儲けるな、下げに儲けよ」という、もう一つの家訓がありましたので、バブルにも大きな影響を受けることなく、今日に至ったわけです。そして、さらに、ジャスコから新しい時代に対応すべく、イオン株式会社に社名を変更したのです。

では、「企業というものは、いったいどうあるべきか」。もちろん、成長をし、収益を上げるということは当然であるわけです。私の郷里の四日市はかつて公害の町でした。四日市ぜんそくというものも有名でありました。その頃の四日市の自宅は、四日市のコンビナートから５～６km 離れたところにありましたが、亜硫酸ガスによって、庭のナンテンの実が成らなくなり、モクセイの花が咲かなくなりました。そして、そのようなものに最も弱いものは針葉樹で、スギの木が１～２本枯れるという、そのような環境の中で過ごしました。私は、そのような意味も含めて、環境あるいは、公害というものに対して、そのころから非常な関心をもっていたのです。

その後、最初に私が行ったことは、今から 26 年前、ようやくジャスコも株式を公開し、順調に成長させていただけたことは、やはり、最初に郷土の三重県で支持されたおかげだと思って、郷土に何か恩返しをしたいと思いました。当時、三重県知事の公約の中で残っていたことに、美術館の建設というものがありました。しかし、今から 26～27 年前ですので、その当時は、それに対して賛成や反対などいろいろな意見がありました。私は、知事に「私どもが財団をつくって、バックアップをします。『民間もバックアップをするのだから』というかたちで、議会でも説明をしていただいたらどうですか」ということを申し上げて、財団法人岡田文化財団をつくることにしました。私のイオン株式会社の株式を基本財産にして、そこから生み出される果実（配当）を文化財団としての費用につかっていくということでした。

ところが、当時、財団をつくろうとしたら、財務局から「株なんてものは、どうなるか分からないので、それを売って現金にして財団の基本財産にしなさい」と言われました。株を売ると、税金がかかって、お金が少なくなってしまう。それだと、私の思っていることと違うから、止めてしまおうかという気持ちになったのですが、知事方の努力もあり、「それでもよろしい」ということになり、「ただし、最低の現金だけ積んでください」ということで、1,800 万円を積んで、財団を設立しました。

その 5 年後、もう一度、日本の伝統的なよきものを見直す時代に来たのではないかと思い、「伝統産業振興財団」をつくりました。今は、それを合併して、一つの岡田文化財団として三重県で運営しています。三重県の美術館には、シャガールの絵をはじめとして、約 30 億円分の絵画を寄贈させていただきました。イオンの株式は、昨日は 2,800 円余だったと思います。現在、その基本財産は 2,000 万株ですので、時価に直せば、560 億円くらいになるのではないかと思いますが、そこから、生み出される果実（配当）によって、岡田文化財団を運営し、そして、三重県の若い芸術家・音楽家たちや、伝統的な三重県の産業（万古焼や伊賀焼など）に対してのバックアップをさせていただいています。

戦後、昭和 20 年代になると、スクーターや自動車が出てきました。そのころは、保険というものに、ほとんどの人が入っていない時代です。したがって、交通事故が起こって、その家庭の中心がいなくなると、高等学校を辞めなければならないという生徒がいたのです。当時は、1 年間に 1 万 2,000 円を出せば、高校に通えた時代です。その頃の奨学資金は、大日本育英会の奨学資金だけで、それは、高校に入る前に、家庭の事情によって支給されるものだったので、入学後、途中から与える奨学金というものが、その頃はありませんでした。私は、先ほど申しましたように、非常に若くして両親を亡くしましたので、そのような方々に奨学資金を出して支援する、「風樹会」という交通遺児育英会を組織しました。私どもは、非常に小さな規模の岡田屋でしたので、最初は 10 人くらいから始めて、それからだんだん 30 人、50 人、100 人というように増やしていきました。

その頃に、四日市の駅前が 70m 道路になりました。駅前に店舗をつくったときに、そこに花壇をつくって、花を植えました。しかし、当時は、一晩で花が盗まれるような時代でした。それでも植え続けて、その花壇は、ずっと長く続きました。

米国の小売業のの社会貢献活動から学び、イオン１％クラブを設立

そのようなことを、その頃から、ずっと行ってきました。そしてさらに、ジャスコになり、「ジャスコ 20 周年記念に何をすべきか」ということを、いろいろ考えたわけです。

アメリカに、あのバブルの最中に私どもが買収したタルボットという会社があります。それは、ミネアポリスに本社があるゼネラルミルズ社という食品総合メーカーの子会社で、アパレルのチェーンの会社です。そのため、たびたびミネアポリスを訪問しました。ミネアポリスというところは、アメリカの中でも最も社会貢献活動の盛んなところです。そして、「５％クラブ（five percent club）・３％クラブ（three percent club）」というような社会貢献活動をする企業（例えば、３Ｍ：スリーエムなどの非常に有力な企業）が、社会貢献活動を活発にやっていらっしゃる地域です。そこに通っている間に、そのような企業のあり方というものを教えられました。特に、われわれと同業である、ミネアポリスで最も古い歴史を持つデイトン・ハドソンという百貨店。この百貨店が、かつて M&A で買収されかかったことがありました。しかし、非常に早くから「５％クラブ」をつくって、ミネアポリスの地域に、たいへんな貢献をし続けた企業であったために、「このような会社が他の資本に買収されてはならない」と、市民が立ち上がって、州法を変えてまでもその M&A を阻止したという歴史があるということを、そのとき聞きました。このことは、私が非常に誇りに思っていることです。アメリカの中でも、最も社会貢献活動が盛んなミネアポリスに於いても、社会活動を早くからやっていたところが、われわれの同業の小売業なのです。

それで、私は、この 20 周年に対して何をやるべきかを、社会貢献活動をアメリカのミネアポリスから学び、「イオン１％クラブ」の設立をしようと思ったわけです。「１％クラブ」をつくって、イオン各社の税引き前の利益の１％を社会貢献活動に使うことを決定しました。ちょうどその頃、ドイツの東西の壁が崩壊して、20 世紀の最大の東西問題がやや終焉に近づきました。そうすると、あと 10 年、21 世紀の最大の問題は何か。それは、南北問題ではないか。しかも、その南北問題のキーワードは環境ではないか。というように考えて、「１％クラブ」と同時に、もっと社会貢献活動の中心に置くものは環境であろうということで、財団法人イオン環境財団を設立することにしました。

このような財団というものは、通常、認可に２年はかかります。その頃、既に、リオの地球サミットやアジアに於ける環境のサミット等も計画をされていましたので、１年５ヵ月くらいで、非常に早く、この環境財団の認可をしていただきました。

リオのサミットに参加させていただいた際、帰りにサントスの港に行きました。まさに、かつて（私の青年時代）の四日市のような様相でした。空は、当時の四日市の色と

全くよく似ている。コンビナートの煙突から噴く火、あるいは薄い煙。そして、リオの川には、ゴミがいっぱい。ドロドロとした水が流れている。かつての四日市の町を思い出したわけです。

ショッピングセンターを鎮守の森に

そのような経験をもって、この環境財団というものをつくるべく、そして、「いったいこの環境財団で、どのような対応をすべきか」ということを、その後、いろいろと実行に移してきました。この環境財団の５周年記念には、この京都の梅原猛先生に記念講演をしていただきました。梅原先生は、そのときに、「人類の文明というものは、緑と水のあるところで繁栄をし、その緑と水を食い潰して、そして、その文明は滅び去っていった。エジプト文明も然り。ギリシャ文明も然り」というお話をされました。これは、非常に私の心に焼き付いた言葉でした。では、日本や先進国の町を見てみて、どうでしょうか。すっかり緑が無くなっています。そして、どんどんとコンクリートの建物が連立していきます。そのようなことも含めて、私は木を植える運動を始めたわけです。

横浜国立大学の植生学の宮脇昭先生とお会いする機会がありました。宮脇先生は、「かつて日本には、鎮守の森のというものがたくさんあった。神奈川県にもたくさんあった鎮守の森が、今ではほとんど無くなってしまった」と、おっしゃいました。「では、現代の鎮守の森は、私どものショッピングセンターが代わりになれないか」という話をして、そして、私どもがつくるショッピングセンターに木を植える運動を始めたわけです。先ほどのビデオにあったように、最初は、マレーシアから始めました。

では、木を植えるということは、いったい何か。私は、小売業の最大の特徴は、毎日、そのお店に何万人というお客様がいらっしゃることだと思っています。そして、小売業は、その店舗から、いらっしゃるお客様に情報を発信することができ得るものであろうと思うのです。現在、私どもが、大きな規模のショッピングセンターをつくるときに、その前に、地域のお客様に呼びかける。そうすると、たくさんのお客様に集まっていただけます。その人数が、年を追うごとに、どんどんと増えてきました。今、ある程度の規模のショッピングセンターですと、2,500～3,000 名のお客様がボランティアとして参加してくださいます。最近の傾向としては、それに子供さんたちが非常に多くなってきました。そして、一緒に苗木をショッピングセンターの周辺に植えるのです。あっという間に３万本くらいの木は植えられます。今までに約 600 万本に近い木を植え続けてきました。それは、単に、私どものショッピングセンターだけではなく、いろいろな国内外の地域で、そのようなかたちで木を植えています。

4,200 人のボランティアが旅費を自己負担して万里の長城で植樹

今から、15～16 年前、店舗巡回をするために北陸から東北の海岸線を車で走ると、

マツの木が海岸線にたくさん植えてありました。日本海の風によって、かすかに傾いていました。冬になると片側が茶色になり、反対側はまだ青いわけですが、その青い部分がだんだん少なくなって、枯れていきます。これは、15～16 年前からの現象でありました。もちろん、マツクイムシの影響もありますが、その前に、亜硫酸ガスによって木が弱り、弱ったところにマツクイムシがつく。そして、どんどん枯れていくということなのです。その道を毎年通ると、毎年様相が変わってきています。一番北端の秋田県の海岸に、JR が、かつて国鉄時代に防風林として海岸線を走る線路の向こうにマツの木を植えました。それが、昨年そこに行くと 100%と言っていいくらい、立ち枯れしていました。そして、線路の山の手のマツの木も全部枯れていました。まさに、幽霊の木が立っているような、たいへんな光景でありました。その後、私どもは、JR 東日本の皆さん方と、地域の皆さん方と協力して、一緒に、そこに木を植えに行ったわけですが、実に、惨憺たる光景でした。秋田県では、20～30 億円のお金をつかって、山の上の枯れた木を切って処分をしているそうですが、なかなか追いつかないような状態であります。

私たちの環境財団で最初に始めたことは、日中の環境フォーラムです。日本からは、東大の総長でありました加藤先生に団長になっていただき、何人かの学者の先生方も一緒に行っていただいて、中国の環境学会の先生方と北京で環境フォーラムを、財団として主催しました。１９９５年第 2 回のフォーラムの席で、万里の長城に木を植えたらどうかということで、北京市政府と一緒になって、万里の長城に木を植える運動を始めたわけです。中国でも植樹は、鄧小平さんをはじめとして、非常に熱心なのです。万里の長城の植樹には、たいへん多くのお客様が一緒に参加してくださいました。私どもの店舗で募集をして、３年間で、日本から 4,200 人の方に行っていただきました。全部、自腹を切って万里の長城に木を植えに行こうというボランティアの方々です。それに、中国の高校生やボランティアの方々が参加してくださって、万里の長城周辺に 39 万本の木を植えました。かつては、その辺も、ずっと緑であったわけですが、あの万里の長城をつくるために、周辺の木を全部切って、レンガを焼いたのです。万里の長城周辺は非常に厳しい環境のため、なかなか大きく木が育ちません。これについても、中国の学会の方々と宮脇先生にもお越し願って、どのような木が育つのか研究をしていただいた結果、「蒙古楢（モウコナラ）の木が、かつては、この辺に群生をしていったはずだ」ということで、蒙古楢（モウコナラ）の群生をしている地域から、子供たちにドングリを集めてもらって、それを苗木にして植えました。冬には零下何十度となり、最近は、非常に雨が少ないということもありまして、なかなか成長しません。しかし、どうにか育ってきました。北京市政府は、そこを、森林公園として残すということで、施設等も少しずつ整備しています。

天敵のニホンオオカミが絶滅し、シカの食害に苦慮する知床の森

その他、生態系というものは、非常に難しいものであります。例えば、この度、世界遺産になった知床ですが、知床半島というところは、非常に自然がたくさんあるようですが、開拓のため、戦前から木を切って農地にし、特に戦時中は、そこを分譲して農業をやりましたが自然環境が厳しいため、離農し荒れ野原になっています。しかし、知床には、今から２代前の町長に、立派な方がおられて、それをナショナルトラスト運動を起こし、ほとんど買い上げて、そこに木を植える運動を、「100 年計画」と言って、始められました。私どももそれに参画するために知床に行ったのですが、そこで、生態系というものは、たいへん難しいものだということを、つくづく感じさせられました。例えば、知床には、かつてニホンオオカミがいました。ニホンオオカミが適当にシカを食べて、自然に調節されていたわけです。ところが、人間が「オオカミというものは悪い奴だ」ということで、絶滅させてしまいました。「シカは神の使い」だということで、そのままにしていると、どんどんシカが増えて行き、シカが芽を食べる、そして、冬には、かなり大きく育った木の皮も食べる、という被害が出るようになりました。このままでは、野山が荒れてしまうということになり、まず考えられたことは、「角も売れるかも」ということで、シカのオスだけを一定期間捕獲をすることになったようですが、そうすると、オス１匹につきメスが 30 匹ということになって、それでも、どんどん増えるので、４～５年前からメスも一定期間捕獲するということになったようです。このようにシカの被害がたいへんなわけです。

私どもは、そこで木を植えました。最初の年は、春になって芽が出てくると、芽を全部食べられてしまうということで、シカができるだけ嫌いな植物を植えたのですが、だめでした。それで、３ｍの柵をつくって、成長するまで柵の中で育てようという計画を立てたのですが、よりによって、その冬にたくさんの積雪があって、柵を飛び越えてシカが入って来た。そこに、クマまで飛び越えて入ってきてしまって、シカを全部食べてしまったということも起ったようです。

生態系というものは、知床のようなところでもそのような現象が起こっています。まして、人間が、コンクリートなどで加工していると、そこでいろいろな問題が起こることは、当然であろうと思います。したがって、そのようなことも考えながら、現在、いくつかの木を植える運動をしています。

10 月に、中国の青島（チンタオ）に植樹に行きました。青島に私どもの非常に繁盛している店舗があって、その青島の郊外のかつてダムであった周辺を、青島市が公園にするため、その周りに植樹をするということになりました。それに協力しようということで、日本から、約 100 名のボランティアの方々と一緒に行きました。青島市は、韓国に非常に近くて、韓国の企業は、たくさん進出をしています。青島には、韓国の方は約３万人いらっしゃいます。日本の企業もたくさん進出をしているのですが、日本人は3,000 人くらいです。その中の 100 名くらいの方がボランティアで出てくださいました。そして、「中国も変わった」と思われることは、その青島の私どもの店舗で、「このよう

な植樹をやるので、ボランティアとしてやっていただけませんか」と募集をしましたら、２週間で 500 人以上の方から参加の申し込みがありました。私どもの店舗の前からバスを連ねて、離れた郊外まで行って、一緒に木を植えました。

カンボジアの義肢センターの運営費を店舗での募金で支援

私どものような小売業の店舗は、お客様に情報を発信すれば、それに答えていただけるという特性をもっています。青島や万里の長城の植樹についても然りですし、その他、いろいろな災害が起こったとき、例えば、新潟の地震。あるいは、インドネシアの津波。そのようなことが起こったときに、各店舗で募金をすると、非常にたくさんのお客様に、短時間で賛同していただけます。それに私どもの「イオン１％クラブ」から、同じ金額をマッチングして、義援金としてそれぞれの地域に提供することが出来るのです。

また、「１％クラブ」で行ったことの一つに、カンボジアへの支援活動です。カンボジアは地雷のたくさんあるところで、特に、バッタンバンというタイの国境に近い地域は、最も地雷の多いところです。そこで、日本赤十字社が「バッタンバン義肢センター」を行っています。地雷で足や手をやられた方々に、義肢をつくって提供するという仕事です。これに私は賛同して、募金と「１％クラブ」からの拠出金で年間に 5,000 万円～6,000 万円を、その義肢センターの運営費として拠出していました。

そこで、一つ感じたのですが、その地域には、いろいろな先進国の、そのような施設がありました。その中に、イタリアの立派な病院がありました。そこには、イタリア人のお医者さんもいらっしゃいました。「なぜ、このようなところにイタリアの立派な病院があるのか」と聞くと、「イタリアは地雷をつくっていた。そして、その地雷でたくさんの方が傷ついた。そこで、その地雷工場周辺の方々が立ち上がって、お金を集めて、この病院をつくりました」ということでした。私どもが日本赤十字社と一緒にやっていた義肢センターでも、年間の運営費が 5,000 万円～6,000 万円かかるので、「この規模だと１億円以上はかかる」と思って、「維持費はどうしていらっしゃいますか」とお聞きすると、「イタリアはサッカーが非常に盛んですので、そのサッカーのチャリティで、この維持費を生み出している」ということでした。日本でも、サッカーくじなどをやっていますが、日本は、そのお金を何につかうのでしょうか。先進国は、皆、そのような施設をその周辺に持っていました。カンボジアの ODA は、40%以上を日本が拠出しています。そして、道路や橋をつくったりしていますが、民間が主体でやっていることは、他の先進国に比べると、非常に少ないということです。政府よりも民間の方が、はるかに、その国の人たちとの心が通じ合うということだと思います。最近では、日本でも NGO やその他で、随分、活躍をされる方たちが増えてきましたので、ようやく日本も、そこまで来つつあると感じています。

かつて、150 万人とも 200 万人とも言われるカンボジアの知識人は、あのポル・ポト派に全員殺されてしまいした。そのような現実が、アジアの中でそう遠くない前に起こ

っているのです。そのカンボジアに、ようやく平和がきて、一番失われたものは、教育であります。学校の先生は、全て殺され先生も学校も数が足りません。それでは、私どもが、「１％クラブ」で、学校をつくったらどうかと考えました。

店舗での募金と１％クラブからの援助をあわせて カンボジアに 149 校の小学校を建設

今から数年前の話ですが、私は、「どのような学校があるのか」と、カンボジアのプノンペンから随分離れた田舎の、電気も無い、裸足の子供がたくさんいるようなところに、学校を見に行きました。その小学校は５教室あるのですが、学校が少ないために、その教室を午前と午後の２部に分けて使うのです。その時、カンボジアは夏休みでしたが、１教室だけは勉強をしていました。そこで、私が、腰を抜かして驚いたことがあります。なんと、その１教室で、７～８才から 15～16 才の子供たちが 30 人くらい集まって、１台のコンピュータをソーラーで弱電を起こして、勉強していたのです。

その光景を見て、「日本では、どうなのだ」と思いました。カンボジアの子供たちの目の色は、日本の子供たちの目の色と違います。では、そのコンピュータが、なぜこのようなところにあるのかと聞くと、これは、アメリカのアップル社が学校に１台ずつ寄付をしているのです。企業の長期戦略だということで、ここでまた驚きました。日本のコンピュータのメーカーはそのようなことはしていません。これでは、50 年後くらいには、日本が途上国になって、カンボジアが先進国になるのではないかとさえ思いました

ところが、そのとき、一つ安堵したことがあります。この学校のニックネームが「米百表」だったことです。小泉首相が「米百俵」の話をされた半年ほど前の話です。新潟県の長岡高校の卒業生の方々がお金を集めて、この学校を寄付されたそうです。日本の教育に対するよき伝統が、カンボジアで花咲いていて、「日本も捨てたものではない」と、やっと、胸を撫で下ろしました。私がこのことを、あちこちで話していたら、長岡の方から私どもの事務局に連絡があって、「学校を、もう１校つくる」という話でありました。

私どもはそれ以来、全国の店舗でお客様に呼びかけて、「カンボジアは、このような状態です。学校が全くありません。学校があっても、雨の漏るような荒ら屋の中に子供が集まって、勉強しているのです」という現状を訴えて、募金活動をしました。募金活動は、３年間続けて、それに「１％クラブ」からマッチングをして、カンボジアに 149 校の小学校をつくりました。いろいろな方々が、カンボジアには学校をつくっていただいていますが、まだ、全く足りません。私どもは、カンボジアが終わったあとは、次はネパールにと思っていて、ネパールに学校をつくり始めたのですが、ご承知のように、ネパールは政情に問題が起こっているので一時中止して、2006 年からはラオスに、また学校をつくり続けていこうと思っています。

日本人として、アジアの一員として、
あの大戦も思い出しながら何をすべきか考える

日本は、アジアの一員でありまして、アジアは非常に成長しました。特に、最近の中国の成長は、目を見張るようですが、まだまだ、ラオスやネパール、ミャンマーなどでは、学校その他の施設が、全く足らないわけです。そのような問題に対して、日本人として、アジアの一員として、そして、あの第二次世界大戦も思い出しながら、どのようなことをすべきかを考えるべきではないかと思います。

そのようなことを、私どもは、地域の方々と一緒になって、協力しながらやっていける小売業の特性として、それを十分生かすことができると思っています。世の中が、どんどん大きく変化をする中で、そして、企業としてのあり方、あるいは、企業だけではなくして、それぞれの人生としてのあり方というものは、どうあるべきかということを、よく考えなければならないと思うのです。

私は、この９月で、満 80 才になりました。戦後、昭和 20 年から 55 年間は、走り続けてきたわけですが、後の５年間は、木を植えることくらいが仕事です。満 80 才になったときに、私どもの企業の幹部が、80 才のお祝いをしてくれました。そのときに、私に記念品として、一つの詩を額に入れてくれました。それは、谷川俊太郎さんが書かれた詩でして、それを朗読して、私のお話を終わりたいと思います。

木を植える。
それは、償うこと
私たちが根こそぎしたものを

木を植える。
それは、夢見ること
子供たちの健やかな明日を

木を植える。
それは、祈ること
命に宿る太古からの精霊に

木を植える。
それは、歌うこと
花と緑をもたらす風と共に

木を植える。

それは、耳をすますこと
蘇る自然の無言の教えに

木を植える。
それは知恵、それは力
生きとし生けるものを結ぶ。

80 才の祝いに、私にとって、最もうれしい贈り物を社員がしてくれたと思っています。ちょうど、時間になりましたので、これで、お話を終わらせていただきたいと思います。尚、質問があれば、お受けしたいと思います。

一方井　岡田理事長、たいへんありがとうございました。本日は会場から、花束が届いていますので、お受け取りいただけますでしょうか。

会場　【花束贈呈】
「小さな大使」でお世話になりました。またお会いできて、うれしいです。

岡田　この方は、高校時代に、中国の青島から、私どもが「小さな大使」でお招きした方で、今、京都大学で学んでいらっしゃいます。今までに、約 300 人の、各国の高校生を日本に招待していまして、今年は、ちょうど 15 周年でしたので、そのうちの OB の方 180 名ほどが日本に集まって、それぞれの国の方々と交流をしていました。

一方井　ありがとうございました。私もこのような講演会に何度かでていますが、外国の方からの、このような花束贈呈というものは初めてです。まさに、理事長がずっと蒔かれてきた種が、本当に今、世界に広がっているのだなということを、実感いたしました。また、お話を伺って、冒頭におっしゃった「小売業は平和産業である、という理念の下にやってきた」ということもたいへん印象に残りました。そして、「小売業は、毎日いらっしゃるお客様に情報を発信することができる」ということも、おっしゃっていました。ご承知のように、イオングループは、日本の中でも環境と経済を融合し、環境に配慮する企業の中では、まさに、先頭を走っておられる企業です。地球温暖化問題もそうですが、これからは、消費者の動向というものが解決のカギになるので、日々、消費者の方々と向かい合って、お仕事をされているイオングループは、そのような意味で、

これから社会が解決していくべき、買物文化をリードしていっている存在であるというように、私は思います。
　せっかくの機会ですので、是非、会場からも質問をどうぞ。

会場　岡田屋呉服店さんからジャスコ、イオンと社名を変えてこられたわけですが、ジャスコ、イオンという名称の由来をお尋ねしたいです。不勉強で恥ずかしいのですが、よろしくお願いいたします。

力強さを感じる「ジャスコ」から〝永遠〟を意味する「イオン」へ社名変更

岡田　今、日本でもM&Aだとかいろいろな問題が起こりつつあります。しかし、合併というものは、上手くいかないと、社内でたいへんな問題が起こります。私は、岡田屋というのれんを捨てて、合併という手段をとりましたが、これも、実は、歴史に学んだわけです。我が郷土の四日市には、戦前、今よりさらに大企業であった東洋紡績があります。この会社は三重紡績と大阪紡績が合併してできた会社です。また、伊勢電と大阪軌道、その他、奈良電等と合併して、近畿日本鉄道ができました。このような先輩がいらっしゃったということも含めて、私は、合併に踏み切ったわけです。
　ところが、その合併のときに、何が問題になるかと言うと、一つは社名です。いろいろな例をみても、合併をすると、名前が長くなります。ですので、私は、合併したときに、懸賞をつけて、社内で社名を募集しました。そして、選考委員を決めてやってきて、その結果として、「Japan United Stores Company : JUSCO、ジャスコ」という名称が優勝したわけです。ところが、「JU」で「ジュスコ」ではないかと言う人もいたのですが、私は野球をやっていましたので、「ジャスト・ミートはJustと書くよ」と言ったことで、「ジャスコ」ということになりました。これは、一つはスーパーですので、濁音が入ると力強い。あ行がたくさん入ると、日本人は発音しやすい。このようなことで、「ジャスコ」と決めました。ところが、その後、20周年で、「イオングループ」として、グループ名とマークだけ変えました。それまでのマークは、緑と赤と白で、当時はそれが流行でした。ところが、いろいろと考えてみると、あまり色を、たくさん使わない方が「美しい」と思い、そのときにマークだけを変えました。年間売上高1兆円を超す企業になると、社名まで変えるということはなかなか難しいことです。やっと、30 周年で、私が辞めると同時に「イオン」と社名も変更しました。21 世紀になった年でしたので、全く新しい時代感覚で、新しい時代に対して、新しい経営陣で今後はやるべきであるということで、「イオン」としました。「イオン」とは、「永遠」という意味なのです。

会場　この５年間、ボランティアならびに植樹で、世界各国を渡り歩いているとお聞きして、私も非常に共鳴しています。最近、テレビで、足尾銅山の廃鉱の跡の岩山に木を植えると、木が茂って、クマやシカなどの動物が帰ってきた、という画面を観ました。やはり、環境に合った木を植えるということが、その地方や気候に影響してくると思います。また、木は早く生長する木を植えなければならないと思うのです。50 年、60 年、100 年もしないと一人前の木にならないのではなく、早く炭酸ガスを吸収する木を植えていかなければならないと思うのです。この問題について、どのような木を植えていけばいいかということを、教えていただきたいと思います。

岡田　日本は、戦後は家がたくさん焼けて材木がありませんでした。そして、林野庁が一生懸命になって、スギやヒノキなどを植えたわけです。最近は、外材がどんどん入ってきますし、鉄筋コンクリートの建物が多くなって木材を比較的使わなくなったため、非常に材木の値段が安くなりました。かつては、山持ちが大金持ちだったので、戦後 20 年頃の高額所得者は、皆、そのような人たちばかりでしたが、今は全く駄目になりました。しかも、人手が掛かるため手入れができなくなり、山が荒れるようになったのです。私どもと活動をしてくださっている横浜国立大学の宮脇先生という方は植生学の大家で、世界中、いろいろと調べていらっしゃる。木を植えるときは、宮脇先生にお願いして、「この地域では、本来の木はどのような木だった」ということを言っていただいて、そして、そのような木をできるだけ植えています。しかし、万里の長城のような非常に厳しいところは、なかなか大きくなりません。一昨年、マレーシアで植えた木は、雨が多く、暖かいものですから、1 年で背丈ほどに育っていて、たいへん生長しています。ですから、その地域にあった木を選定して植えていかないと、なかなか難しいのではないかと思います。

　それから、砂漠化はモンゴルや中国あたりでも進んでいるわけですが、これに対して、日本からもたくさんの方々がボランティアとして、木を植えるなどの活動をしていらっしゃいます。ですから、国際的な意味での協力も、これからは団塊の方々が定年になりますから、そのような方々が、時間を余したら、ボランティアで活躍していただくという場も、増えてくるのではないかと思っています。

一方井　ありがとうございました。時間が来ましたので、ここで終わりにしたいと思います。ご興味のある方は「イオンの環境報告書」、これはインターネットで簡単に見ることができますので、ご覧いただければ、たいへん勉強になると思います。今日、岡田

理事長がお話になったことも、もちろんありますが、その裏にも、見えない、いろいろな努力をもっとされていて、その数字がきちっと入っていますので、勉強になると思います。それでは、これで、岡田理事長のご講演を終わりたいと思います。改めて、拍手をお送りいただきたいと思います。